Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-05

弁惑物の思想基盤の一端 : 『太平弁惑金集談』の一篇を中心として

門脇, 大

(Citation)
国文学研究ノート,44:1-17

(Issue Date)
2009-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012384

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012384

弁惑物の思想基盤の一端
――『太平弁惑金集談』の一篇を中心として

門脇　大

一　はじめに―弁惑物の諸作品

近世期の怪異小説を俯瞰した時、そこに奇妙な一群があることに気付く。即ち、十八世紀中葉に集中的に出版された弁惑物の一群である。これらは「惑を弁ず」る性格をもつ書物の謂であり、その弁惑が怪異に向けられたとき、怪異の暴露、あるいは怪異に対して合理的な説明をするものとなる。(1)

本論では弁惑物の基本的な性格をあきらかにし、その思想の起源がどのあたりにあるのかを検討したい。はじめに弁惑物がどういった作品をその範疇とするのか、確認しておきたい。そして、弁惑の要素が近世怪異小説においてどのように顕れるのかを観察し、弁惑物が出現する前提をみていくこととしたい。また、弁惑物の思想的背景が奈辺にあるのかを、宝暦九（一七五九）年刊『太平弁惑金集談』（以下、『金集談』と略記する）の一篇を中心に考究する。『金集談』の一篇に注目するのは、この話の源泉、拡がりを追求していった時、弁惑物の思想基盤の一端をあきらかにし得ると考えられるからである。弁惑物の淵源を注視し、その上で弁惑物の一群に目を向けた時、近世怪異小説の可能性が拡がり、従来とは異なった風景がみえてくるのではないかと考えている。

まずは時系列順に弁惑物を列挙しておこう。先行研究において報告されている弁惑物を左に記す。

貞享三（一六八六）年刊『古今百物語評判』山岡元隣
元禄四（一六九一）年刊『本朝俗談正誤』
宝永七（一七一〇）年刊『秉燭或問珍』鷹見爽鳩
正徳五（一七一五）年刊『万物怪異弁断』西川如見
享保十一（一七二六）年刊『三才因縁弁疑』村上俊清
享保十三（一七二八）年刊『蛙の物真似』克斎主人
宝暦二（一七五二）年刊『古今弁惑実物語』北尾辰宣
宝暦五（一七五五）年刊『化物判取帳』敬阿
宝暦九（一七五九）年刊『太平弁惑金集談』河田正矩
（安永五（一七七六）年刊『怪談重問菁種』は改題本）
安永三（一七七四）年刊『烏之啄』古隠子
天明七（一七八七）年刊『幽闇世話』湖中突瓢子

寛政十二（一八〇〇）年刊『怪談弁妄録』丹羽桃渓

右の諸作にさらに弁惑物として追加すべきと考え得るものとして左の三作を指摘しておきたい。

享和三（一八〇三）年刊『三教放生弁惑』寛潤

文政元（一八一八）年刊『人狐弁惑談』陶山尚廸

天明七（一七八七）年写『妖怪虚実論』五十狭狭小汀漁父

右の三作についてはこれまで論じられたことも少なく、基礎的研究をすることを第一と考えている。ここにあげることを躊躇するものであるが、ひとまず弁惑物を見渡しておくために指摘しておくこととした。殊に『妖怪虚実論』は、資料紹介すらされた例を知らない。また、知り得る限り、東北大学附属図書館狩野文庫に蔵される一本しか現存しない。また、著者である「五十狭狭小汀漁父」が如何なる人物かもわからない。しかし、他の弁惑物と比べてもその思想、方法に独自性がみられ、注意されるべき作品と考えられる。今後さらに調査を進めていきたいが、ここでは指摘しておくに止める。

弁惑物についてはこれまでまとまった研究がほとんどなく、基礎的な研究もなされていないものがほとんどである。先行研究としては太刀川清氏、堤邦彦氏、佐藤太二氏の諸論考がそのまとまったものであり、資料紹介としては、水谷不倒氏『選択古書解題』がある。(2)

次に、先行研究を参考にしつつ、論者の弁惑物の理解をまとめておくこととする。

冒頭で述べたように、怪異に対する弁惑物は怪異の正体をあかす、あるいは怪異の説明をするといった性格をもつ。こういった弁惑物の全体を見渡し、位置付けを行った先行研究として堤邦彦氏と佐藤太二氏の論考がある。(3) 特に堤氏の論考は近世期の他文芸との関係にも触れ、参考とするところが大きい。堤氏は「儒教あるいは心学、神道などの立場から怪異の謎解きを行なう「弁断」「弁惑」物の啓蒙教化書」が「市井の人情世態にからめた怪異の解明を眼目とする弁惑物読本」を派生した、と弁惑物を位置付ける。また、佐藤氏は弁惑物を「儒学の影響や陰陽五行思想を受けて怪異を解説している」ものと「怪異の正体は人間だったという結末で書かれている話が多い」ものとに分類する。つまり、両者は弁惑物を大きく二つの系統に分類して位置付けているのである。

弁惑物の基本的な性格は以上の先行研究に従いたい。しかし、こういった分類が弁惑物を考究する際に有益であることは認めるが、論者はこのような分類にあえてこだわることをせず、弁惑物、という一群で考えていきたい。なぜなら、これらの分類はその境界線をひくことが難しく、論者は一つ一つの作品の検討を通して、その説明方法、思想の淵源を個別にあきらかにしていくことを目標とするからである。

二　弁惑物の断片

そもそも近世期の怪異小説を概観すれば、既に近世初期の仮名草子に弁惑の芽はあった。山岡元憐『古今百物語評判』（貞

享三・一六八六年刊）は先行研究が指摘するように、弁惑物の先駆けとして位置づけることができる作品である。[4] また、近世初期の怪異小説である『宿直草』（延宝五・一六七七年刊）の数篇には怪異を勘違いや心の迷いとするものがある。即ち、巻一の八、巻四の九、十、十一の四話である。これらについては既に堤氏の論考が備わる。[5] 堤氏は、「中・近世の儒仏思想が創り出した錯誤譚の話型に仮託して、浮世のいとなみに散在する勘違いのおかしさや、怪異は万人の胸のなかにありといったレトリックの興趣を提供し、物語草子の生命にしようとした」という。つまり、『宿直草』において、それらの話は儒仏の宗教性から乖離し、より卑近な話題へと展開していったということがみてとれるというのである。これら『宿直草』の数篇をさらに視野を広げて弁惑物という視点からみるならば、弁惑物へと通ずる要素をみることもまた可能であろう。また、『宿直草』には「好色奇談の原初的なかたち」をもつ話もあり、注意したい。[6] それらは伝統的な怪異譚の設定を利用して恐怖の対象を女のもつ魔性へと移していったものであり、前に述べた弁惑物の要素とは趣を異にするものの、怪異の正体を女の魔性とする姿勢は、弁惑物の話材と一脈通ずるものがあると考えられる。

では、それら近世初期の怪異小説に顕れた弁惑の要素はその後どのような展開をみせたのであろうか。ここでは、近世初頭より陸続と刊行された怪異小説から弁惑物へと通ずるものを検討し、その前提を探ってみたい。

周知の事ながら、近世期の怪異小説は膨大な数にのぼり、それら全てをここで検討していくわけにはいかない。さらに、その数もさることながら、刊写の別、成立年代、文学ジャンルなどを含めた諸作品の性格の違いも考え併せなければならず、一律に検討することは妥当性を欠く。そこで本論では百物語系の怪異小説に絞り、その様相をみていきたい。[7] 百物語系の怪異小説もそれぞれに性格が異なってはいるが、近世期を通じて刊行されたこともあり一つの指標となろう。ここでは、叢書江戸文庫『百物語怪談集成』、『続百物語怪談集成』所収の諸作から弁惑の要素をもつものを左に列挙する。[8]

・延宝五（一六七七）年刊『諸国百物語』

巻之二―五「六端の源七ま男せし女をたすけたる事」①

巻之三―二「近江の国笠鞠と云ふ所せつちんのばけ物の事」②

巻之四―十一「気ちがいの女をみて幽霊かと思ひし事」③

巻之五―十「豊前の国宇佐八幡へ夜な〳〵通ふ女の事」④

十七「靄の林うぐめのばけ物の事」⑤

・元禄五（一六九二）年『諸国新百物語』

巻之一―四「女さくらがり付りあやなし男」⑥

巻之四―一「水で洗ふ煩悩の垢付り髑髏消えたる雪の夜」⑦

巻之四―四「嘘の皮かぶる姿の僧付り越中白山のさた」⑧

・享保十七（一七三二）年『太平百物語』

巻之二―十「千々古といふばけ物の事」⑨

巻之四―三十八「薬種や長兵衛金子をひろひし事」⑩

巻之五―四十九「天狗祟りをなせし事」⑪

・寛延四（一七五一）年『万世百物語』

巻五―三「高位の臆病」⑫

・明和四（一七六七）年『新説百物語』

巻之二―五「僧人の妻を盗みし事」⑬

巻之四―四「鼠金子を喰ひし事」⑭

巻之五―五「肥州元蔵主あやしき事に逢ひし事」⑮

・明和七（一七七〇）年『近代百物語』

巻二―二「貪慾心が菩提のはじまり」（挿絵）⑯

―三「箱根山幽霊酒屋」（挿絵）⑰

巻五―一「巡るむくひの車の轍」（挿絵）⑱

一瞥してわかるように、弁惑の要素を持つ話が作品中に数篇は含まれていることがわかる。少なく感じられるかもしれないが、怪異小説であってみればそれは当然であって、むしろ一例でもあれば注意されるべきことと考える。このようにみてみると、弁惑物が集中的に出版される十八世紀を俟たずとも、その弁惑の種子が怪異小説の中に胚胎していたことはあきらかである。では、これら怪異小説中に記された弁惑の要素を持つ話はどのような様相を呈しているのか、次に検討していきたい。

まず、諸篇をいくつかに分類し、どういった種類の話があるのかを確認したい。但し、この分類はあくまでも便宜的なものである。

A　錯誤譚（②、⑤、⑭）

B　怪異の正体を人、人のいとなみとする話（③、④、⑨、⑫、⑯、⑰）

C　女の執心、魔性に恐怖する話（①、⑥）

D　詐欺譚、人が人を騙す話（⑧、⑩、⑬）

E　怪異の存在を否定、疑問視する話、言説（⑪）

F　怪異を心の迷いから生じたものとする話（⑦、⑮、⑱）

右に示したように、近世怪異小説の中に散見される弁惑の要素をもつ話はいくつかの類型に分類することができる。ここで右の諸例を全て検討する煩は避けるが、後にとりあげる弁惑物の一特性と関係の深いFをみていくこととする。

⑦は、亡妻が夫の元へ毎夜通ってくる話である。不審に思った親が覗くと髑髏と話をしている姿を目撃し、「徳行すぐれ、いとたとき上人」に教化を求める。上人が桶に満たした水をかけると髑髏は消えた。上人は「今爰にあらはるゝは、まよへるものからもとの女とぞ見えつらん。たゞされたるかうべにてありき。爰に清浄の水をかけて、ぼんのふのにごれるをすゝぎ、正念にかへらしむる時、又更に消えてされかうべなし。是れ本来無一物なり。」と怪異現象に仏教的な解釈を下し、妖魔を退ける。

この話では、心の迷いから亡妻の在りし日の姿をみて語りあった、という点が注意される。仏教思想の影響が垣間みえ、注意を要する。この点について堤氏は「怪異を心理現象のひとつのあらわれとみるこの種の説話（『宿直草』巻四の九…引用者・注）の背後に、儒学のみならず、仏教思想の投影が隠見する点も、この際顧慮すべきではあるまいか」というが、この話をみても、そういった思想的背景を想定すべきであろう。こういった話柄、思想は弁惑物に通ずるもの、と考え得るし、そこ

に儒教のみならず仏教の影響も看取される。次の⑮の話もこういった背景を想定させるものであり、弁惑的な思考を探究する際、宗教的な枠組みに固執しすぎることはあまり有効な手段とも思えない。弁惑物の根本に儒教思想があることは明確であるが、実はこのように仏教からの影響も確認されることは注意しておきたい。

⑮は、元蔵主という僧が死人に引導を渡す際、死人が立ち上がった話である。引導を渡す際に死人が立ち上がり、傍らの僧が声をあげた。元蔵主が騒がず、小僧の頭を扇で叩くと死人は元の如くになった。後に死人の幽霊が元蔵主の元へやってきて礼を述べ、今後もこのようなことはあるべきことであるから、死人の顔を見ないよう忠告する。この怪異の原因は「小僧のこはき〳〵と思ひし一念にて引き出したるもの」であるといい、扇で小僧を叩いたから死人は元にもどったのだという。つまり、「こはき〳〵」という一念を断てば怪異はおさまるのである。ここでも登場人物、場面を考えれば、この話に仏教の影響を想定し得る。

⑱は、本文中に弁惑の要素を見出すことはできないが、その挿絵の中の文句に注意したい。そこには「ゆうれいといふ物世に有べき理なし皆我こゝろよりむかつて見る也」と記されている。この一文が挿絵に記される効果は実は大きいのではないか。話の前半において本文では、妾の呪い殺した内儀が妾の夢に現れ責めさいなむ様を描く。しかし、挿絵に記された一文で、この呪詛を行った妾が、自身の心からかかる幽霊をみて苦しむ、ということを伝えている。幽霊の存在を否定していることが確認され、弁惑の一要素と考え得る。

右の諸例から怪異小説の中にも弁惑物へ通ずる要素を見出し得ることが確認できる。しかし、これらの話は明確に弁惑の意識があったものとは言い難く、積極的に怪異を解釈しようとはしない。このような点は弁惑物とは大きく異なると考えられるが、それについては後に弁惑物の例をみていく時にあきらかになるであろう。

右には引かなかったが、筆天斎『御伽厚化粧』（享保十九・一七三四年）などは、その序文において「信疑／迷悟は心裏に有若茫然として能其心／を守り得ぬ人妖物の邪術に逢バなど／まどハずしもあらなむ故に野卑なる言の／葉ながらよせて其名にあづからめやわ」とその創作の動機を述べる。[10] 序文において「信義迷悟」は「心裏に有る」もの、と明確に述べるのである。これは右のFと同様の態度である。序文において右のように述べることは注目される。即ち、怪異小説の序文において、これから述べようとする怪異譚の怪異とは「心裏」にあり、心の外にあるものではない、というのである。既に怪異小説の中の怪異は真に怪しむべきものではなく、その原因をあきらかにしていたのである。

既に述べたように、右に挙げた弁惑物の要素をもった話は近世怪異小説において数多あり、前にあげた例はほんの一部にすぎない。しかし、これらの例をみていくだけでも弁惑の要素が十八世紀を俟たずとも怪異小説中に散見され、弁惑の下地は用

意されていたことが確認されるのである。しかし、これら怪異小説の中の弁惑的要素を持つ話と弁惑物との間にはなお、距離があると考えている。次に、弁惑物の一篇を検討し、これら弁惑の要素をもった話と弁惑物との間にどのような違いがあるのかをみていきたい。また、こういった弁惑の要素がどこからきたのか、その出所は一つではないが、次の検討を通してその一端をあきらかにしたい。

三『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」の一特性

『金集談』は讃岐の人、田保里翁（河田正矩）による弁惑物の一つである。[11] 田保里翁その人の思想の独自性については佐久間正氏による論考が備わり、[12]『金集談』の他に『家業道徳論』、『三世道しるへ』などの教訓書をものしている人物である。[13]

『金集談』の一篇の基本構成は、伊藤龍平氏の述べるように「話の前半部分に怪異現象を記し、後半部分でその謎解きをする」ものである。[14] また、作中に書名をあげる話が十三話ある。その引用書は、儒書、物語、軍記、教訓書など、幅広い分野にわたる。ここでは、弁惑物の思想基盤の一つと考えられる儒書に特に注意を向けたい。本来ならば、その一つ一つを検討すべきであるが、紙幅の都合もあり、ここでは巻四「女幽霊以碁石解其惑事」を取上げ、その特徴の一端を示すこととする。何故ならこの話の出典としてあげられた陳淳『性理字義』は「朱子学の基本用語解説書」といい、[15] 弁惑物の特徴、思想基盤を考える上で特に注意すべきと考えられるからである。

はじめに『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」の本文をあげる。[16]

○女幽霊以碁石解其惑事

昔唐土に若き夫婦の者有階老の契浅からさりしに／思ハすも其婦病に侵されて死したり夫悲に堪ざり／しか共力なく是を葬しに其夜より件の婦（a）。有し姿に／少しも換らす夫の臥たる所へ来りぬあやしとおもへとも／言語応対在世の時分の如くにして夫の傍に添臥ぬ／曙近くなれバ何処ともなく消失ぬ月日経て夫も／漸く是を厭ふ心の生して様々の仏事を修し種々／厭勝の術をなせハ女ハはや其事を前に心得て我を／すさむ心にてかゝるわさし給ふこそ怨なれといとゝ歎の／増りたる風情なれバ夫もいとゞあぐみはてゝいかゞすべきと／思ふ折ふし或道士の来りて申けるハ（b）死る者二度帰らず／今其ことく形を現ずるハ皆其方か心の迷ひなり（c1）疑／ハしと思ハゝ今夜女の来れる時碁石をかそへて手に／握り其数并に黒白の色を問見るへしと教けれは（d）／男。道士の教しまゝに石の数黒白を問しに（e1）女打笑て／其品をいふに少しも違ハす夜明て道士に語るにさも／有へし今夜ハ其方も石の数をかぞへず色をも見ずし／て其品を問べしと教ゆ男亦教のまゝに／（e2）女少し打／案たるやうに見へしか終に其色も石の数も云果さ／ずして止みにけり夜明て亦道士に告しかハ其時道／士の曰元来女の来ると思へるも外より来るにハあ

はじめに『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」の本文をあげる。[16]

らす／皆其方か心の迷ひて（c2）女の来れるとおもふ也其ゆへは／前夜碁石の数と色を知て出し時ハ汝の心に知し／事ゆへ数をもいろをも違へさりしが昨夜数をもいろをも／弁へずして問しにより其方か心にもとより知らぬ事故／其品を云得ざりし也爰を以て知るへし女と思ふも皆／是其方か迷の一心なり（c3）とさとしけれバ其時とくと／心得て心気漸く定しにや其後ハ夢にも見へず成／にけりと性理字義に見へたり世にいふ所の幽霊なと／は皆此類と推て知るへし

「昔唐土」のことと場面を設定し、亡妻が夫の元へ通う怪異を述べる。仏事、術を試みても亡妻は去らない。そこへ道士があらわれ、亡妻の正体は「心の迷い」と断ずる。そして、碁石を数えてその数と白黒の色を問うてみるよう勧める。果たしてその夜、亡妻は見事にその数、色を言い当てる。また道士の教えの如く、次は自身も数えることなく亡妻に問う。すると亡妻は答えることができない。その後、亡妻を夢にもみることがなくなった、という一篇である。

長々と全文をあげたのは、ここに記された「性理字義に見へたり」（波線部）というところの『性理字義』との関係を具体的にみたかったがためである。

では、次に本文中に示された『性理字義』をみていきたい。井上進氏によれば、『性理字義』の日本における刊本は次のものがあるという。[17]

（1）元和活字印『北溪先生性理字義』元和四（一六一八）年以前に出版

（2）寛永刊『北溪先生性理字義』（寛永五（一六二八）年／九（一六三二）年）

（3）寛文八（一六六八）年刊『北溪先生字義詳講』

（4）寛文十（一六七〇）年刊『北溪先生性理字義』

（5）無刊記『北溪先生字義詳講』

また、『性理字義』には舶載書があり二系統の本文があるというが、それら諸本の問題については先行研究が備わるため、ここでは詳述しない。[18] 本論では、当時一般に目にしやすかったと考えられる和刻本に限って論を進めたい。これらの諸本のうち、（2）（3）（4）を目にすることができたが、[19]（1）（5）は未見。井上氏によれば、（2）は（1）と版式を同じくし、その覆刻といい、また、（5）に該当箇所は無いという。さらに、諸本間に異同があり相違があるという。[20] とはいえ、本論では語句の異同にこだわることをせず、話の展開に注目するため、ここでは（2）の本文と（4）の頭注の該当箇所をあげることとする。

（2）『北溪先生性理字義』（寛永九年、中野宗左衛門版）巻之下「論妖ハ由テ人ニ興ルコトヲ」のうち三段目

張元郡君（a）死シテ後常ニ来テ与ニ語リテ説ヲ渠カ心下ノ事ヲ一一道ニ士ト／与ニ囲ム碁ヲ而ルニ妻来テ（b）捉テ一把ノ碁子ヲ令テ持チ去ラ問フ（d）（e）張不レ知／レ数ヲ便チ道ヒ不レ得イ曰我レ後チ更不レ来ラ矣此レ未シ必ズ真ナラ是レ其ノ／妻ノ游魂滞魄乃チ随テ二張カ心ノ感ニ召シ而来ル（c）被レテ道ニ士ニ窺ヒ破ス／此ノ機ヲ則更

使」不」行

（4）『北溪先生性理字義』（寛文十年、中野小左衛門版）

巻之下「論妖由人興」のうち三段目（頭注）

一把碁子云云　呉郡都穆聴雨紀談云云／云沈氏筆談云云載山陽有女巫（a）極霊／其数白黒碁握于中問其数（e1）莫不符合更漫取碁不数而問之（e2）則不能知其数矣

（4）は本文に記された通り、『聴雨紀談』「巫術」に同話を確認できる。なお、三行目の「于」を『聴雨紀談』では「手」に作り、[21] こちらの方が文意を考えれば正しいであろう。

細かな検討に入る前にもう一つの資料をみてみたい。即ち、林羅山『性理字義諺解』（以下、『諺解』と略記する）である。[22] 大島晃氏によれば、この本は「『性理字義』（『北溪字義』とも）の国字解で、全五巻五冊、羅山没後の万治二年（一六五九）には刊本（四冊）として出版されて」おり、「『字義』原文の忠実な国字解に止まっておらず、原文の典拠と関係資料を検証し、そこから原文を理解し、羅山なりの判断、見解を示そうとしている」という。[23] 次に本文をあげる。

『諺解』（万治二年、山口市朗兵衛版）

巻第八「論妖由人興」のうち三段目

張元郡君（a）死テ後常ニ現シ来テ相トモニ語テ渠カ心／中ノコトヲ説ク郡君ハ張元カ妻ノ封号ナリ一人ノ道／士アリ張ト碁ヲウツ時ニカノ妻来レリ（b）道士即一把ノ／碁子ヲトリテ持テ問シム（d）（e）一把ノ碁子ハ一ニキリノ碁／石也張其石ノ数ヲシラサレハカノ妻即云フコトアタ／ワス我向後更ニ来ラシト云ヘリ是必シモカノ妻ノ遊魂／滞魄ニアラシ即張カ心ノ感シ召ク ニシタカツテ来ルナリ（c）／道士ニ此ノ機ヲ見ツケラレテ則更ニ行ハサラシム機ハ／心ノ発動スル処ナリ心ニアヤツリアルヲ機トス窺／破トハ覷ショ破ノ義ナリミスカス意ナリ

では、右にあげた話を検討していく。まず、概略を記す。

寛永九年版は、張の元に亡妻が常にやってきて、張の心のうちをよむ。一人の道士と碁を打っていると、果たして亡妻がやってきた。道士は碁石を握り、その数を問うが、もとより張はその数を知らない。亡妻は答えることができない。その後、亡妻は現れなくなった。これは必ずしも亡妻の魂魄が留まっていたわけではなく、張の心の招きに従ってきたのだ。道士に張の心理を見破られたために亡妻は現れなくなったのである、という。

寛文十年版の頭注では、山陽の巫女に白黒の碁石を握りその数を問うと合致する。更に適当に取り、その数を問うとその数を知ることができない、という。

『諺解』は寛永九年版と同様のことを注解を加えながら述べる。

さて、これら『性理字義』の諸本、『諺解』と『金集談』の当該話を比較してみると、『金集談』がいずれに拠ったものか決しがたい。『金集談』と右にあげた諸書との異同を表にして示す。

書名	a現れる者	b碁石の数を問う契機	c亡妻の現れた理由	d碁石の数を問うことを発案した者	e碁石の数を問う回数
『金集談』	件の女（亡妻）	いとゞあぐみはてゝいかゞすべきと思ふ折ふし或道士の来りて申けるハ	心の迷ひ／心の迷ひ／迷の一心	道士	二度
寛永九年『北溪先生性理字義』	張元郡君（亡妻）	一一道士ト興囲ム碁ヲ而ルニ妻来テ	其ノ妻游魂滞魄乃チ随テ張カ心ノ感ニ召シ而来ル	一一道士	一度
寛文十年『北溪先生性理字義』頭注	女巫	不明	不明	不明	二度
『性理字義諺解』	張元郡君（亡妻）	一人ノ道士アリ張ト碁ヲウツ時ニカノ妻来レリ	必シモカノ妻ノ遊魂滞魄ニアラシ即張カ心ノ感シ召シタカツテ来ルナリ	道士	一度

同意の『諺解』によったもの、とみておきたい。

ここで注目したいのは、b、cの相違点と二重棒線部分である。以下にみていくこととしたい。

「b碁石の数を問う契機」の前段階として、『金集談』では亡妻を「厭ふ心」から「様々の仏事を修し種々厭勝の術」を行っても、亡妻は事前にそのことを知り、夫も困り果てる、という箇所がある。対して『性理字義』、『諺解』では突如として道士と碁を囲む。ここに、『金集談』が『性理字義』、『諺解』から話を摂取し、文芸化していく創作の工夫がみてとれる。これは、本文の分量をみても一目瞭然で、修飾的な言辞に筆を費やし、原話では展開がやや唐突と思えるところを滑らかにつないでいく。こういった点に原拠の儒学書と『金集談』との差異をみていくことができる。

「c亡妻の現れた理由」を『金集談』が「心の迷ひ／迷の一心」としているのに対して、『諺解』は「必シモカノ妻ノ遊魂滞魄ニアラシ」とし、「張カ心ノ感シ召シタカツテ来ル」ものとする。『諺解』が妻の遊魂滞魄を完全には否定しきらないことと異なる（『性理字義』も同意）。『金集談』においては「妻ノ遊魂」の存在そのものを否定し、亡妻の正体をはっきりと人の心に求める。弁惑の姿勢が顕著に示された一例であろう。

さらに、『金集談』は末尾に「世にいふ所の幽霊なとは皆此類と推て知るへし」（二重傍線部）と、幽霊などは「心の迷ひ／迷の一心」との説を敷衍し、怪異の正体を暴く姿勢を明確に示す。ここにこそ、弁惑物『金集談』の一特徴をみることがで

寛文十年版の頭注はそもそも参考として附された別の話である。よって、諸々の点で異なるのは当然といえる。問題となるのは、「d碁石の数を問う回数」である。ここだけが話の展開上、『金集談』と諸本とで異なる。想定される可能性は三つある。一に作者の創作による、という可能性。二に寛文十年版の頭注を反映した、という可能性。三に『金集談』に載せる話の典拠が別にある、という可能性。以上の三つの可能性が考えられるが、今はこれ以上の資料を挙げ得ぬため、この問題はひとまずおくこととし、一応、本文に記された『性理字義』、あるいは

きる。こういった明確な怪異否定の姿勢は、前にみてきたような弁惑の要素をもった怪異小説とは一線を劃するものがある。ここにこそ、弁惑物の一特性が看取されるのである。

さらに注意すべきは、二章において指摘したように、仏教の影響と考えられる話でも怪異の正体を人の心に求めていた、ということである。即ち、儒仏ともに怪異に対して近似の解釈を行っているのである。

四　『鬼神弁話』の一篇

『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」は、その本文中に「性理字義に見へたり」と記し、その対応は前にみてきた如くである。そして、その文言に従うこととした。ここでは、この話の拡がりを追尾してみる。前にみてきたように、当該話は怪異を否定する話である。同型の話を追求することでこの話の性格をより鮮明に観察し、さらにこの話がどのような拡がりを持っていたのかを知る端緒となると考えられる。

管見に入ったものとして、『鬼神弁話』巻上の一篇がある。[24]『鬼神弁話』について神谷勝広氏は、「序・跋によれば、作者である雲水の無禪は、行脚の途中に立ち寄った備前の国で友人蛭牙ためにこの書を執筆したという。その内容は、魂の有無を論じたもので、仏教的立場から魂の存在を認めさせようとする」といい、また、版元との関係にも言及され[25]る。近世初期の説話の広がりを窺わせる資料である。本論では、その出版の事情には立ち入らず、『鬼神弁話』に記された話と『金集談』の一篇との関連について述べておきたい。まず、『鬼神弁話』においてこの話がどのように扱われているのか、その様相を確認しておきたい。

『鬼神弁話』では「中庸或問ニ諸／子ノ註ヲヽキ中ニ横渠カ註慥ナリ具ニ見ルヘシ」とし、この話を記した後、次のように述べる。

鬼神ノコトハ言語ノ及フトコロニ非ス自／ラ悟テ始テ得ヘシト云心ヲ註セリ是モ少シ愚蒙／ノ為ニ足サル所アリ眼力ヲ以テ見破フルヘシ

「横渠カ註」は、鬼神は言語の及ぶところではないから、自分で悟ってはじめて得ることができるという。そして、この「横渠カ註」は「少シ愚蒙ノ為ニ足サル所ア」るので、結局、鬼神は「眼力ヲ以テ見破フルヘシ」という。さらに、ここでひかれた『中庸或問』の該当箇所を確認しておきたい。『中庸或問』の該当箇所を次に示す。[26]

又問曰沈魂滞魄影響底事如レ何曰須レ是／自家看破一始得張亢群君化去誉来附語亢所レ知事／皆能言レ之亢一日方與二道士一囲一碁又自レ外来道士将／二一把碁子一令二将去問一レ之張不レ知レ数便道不レ得

話の筋はほぼ同じであり、碁石の数を問い、亡妻が答えることができない、というものである。『中庸或問』においては「沈魂滞魄影響底事如レ何」という問に「須レ是自家看破一」として、『鬼神弁話』の記述と同意である。『鬼神弁話』では、「眼力ヲ

以テ見破フルヘシ」と述べるが、これは平易に述べたものと考えられ、基本的に大きな意味の変更がなされているわけではない。

『鬼神弁話』において鬼神は「眼力ヲ以テ見破フル」べきものと解釈され、これまでみてきた資料（朱子学の入門書である『性理字義』やその関連書、朱子の『中庸或問』）では、鬼神は人の心に随って現れるもの、と解釈されていた。そして、鬼神は最終的に見破られてしまうのである。こういった解釈、姿勢が『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」の基となっているのである。

ここでみてきた『鬼神弁話』、『中庸或問』の一篇と『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」とは同型の話であることはあきらかである。しかし、『金集談』本文中において、「性理字義に見へたり」と記す以上、『鬼神弁話』、あるいは『中庸或問』と『金集談』との直接的な説話交渉を云々することはできない。さらに類話を調査する必要があろうが、『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」の素材が今までみてきたような書物にその出所をもつ、ということは注意を要する。即ち、儒学書、あるいは儒学の説（この場合、特に朱子学）を扱った箇所において記された話が弁惑物の素材元となっていたということは、自ずから弁惑物の性格の一端を物語っていはしまいか。少なくともこの話において、儒学の関連書では妖の原因を人の心に求める。また、『鬼神弁話』では「鬼神」は「眼力ヲ以テ見破フル」べきものとして退けられる。そして、弁惑物の一つである『金集談』では怪異は「迷の一心」と解釈され、滅するのである。儒学の怪異否定の姿勢を弁惑物はその基本的な性格の一つとして備えているのである。

儒学の思想を基とし、怪異に対して以上のような解釈が生まれることは、近世怪異小説を考える上で大きな示唆を与えてくれる。従来の研究において、近世怪異小説の背景に儒学を想定してきたものはほぼないといえる。しかし、これまでみてきたように怪異を否定する、あるいは怪異の正体を暴くという弁惑物の背景の一つには明確に儒学がある。それは怪異への反措定であるが、一旦は怪異を語るものである。考えてみれば、怪異を否定するとはいえ、弁惑物の話の素材は怪異譚として充分に機能するものである。話の最後で怪異を否定するが、その部分がなければ奇異な話となる。話の素材自体は怪異譚となるか、弁惑の素材となるか、どちらにも転びうる、危うい振子なのである。弁惑物は儒学、殊に朱子学の思想、方法を基として、怪異を暴いていくことが確認された。このようにみた場合、弁惑物の一源流と考えられる思想、方法が陸続と刊行された他の怪異小説と無関係であった、とは考えにくいであろう。既に二章で指摘したように、近世期において怪異譚は真に怪しむべきものではなく、その怪異の原因の一つに人の心の作用がある、といった意識が既に形成されていたのである。その思想的根拠の一端はこれまでみてきたように儒学書、あるいは儒学の説を扱った書物が担っていたことが確認され、その萌芽は近世初頭に既にあったのである。

次に、『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」において怪異の正体を「心の迷ひ」としていたことに注目したい。二章で確認した弁惑の要素の一つでもあり、怪異に対してこのような解釈をすることは、殊に注意すべきことと考えられるからである。そこで、その基となったと考えられる『性理字義』に記された「妖ハ由テ人ニ興ル」という文言の拡がりに注意を向けてみたい。既に述べたように、『性理字義』は近世初頭に和刻本が出版された朱子学の入門書である。今までみてきたように、弁惑物の基本的な性格の一つは朱子学の思想、方法に裏打ちされたものである。そういった弁惑物の元となった思想が、近世期においてどのような拡がりをもっていたのかに注意することで、弁惑物の形成過程の一端を窺うことができると考えられる。

五　『性理字義』「妖ハ由テ人ニ興ル」の波紋

『金集談』に顕れる怪異否定の姿勢に注意を向けるとき、原話を収める『性理字義』に記された「妖ハ由テ人ニ興ル」という文言には殊に注意する必要があろう。なぜなら、妖しき現象―怪異―の因を人自身に求める、というおよそ怪異譚の対極にあるような文言であり、弁惑の姿勢を明確に示してもいるからである。このようにみた時、「妖ハ由テ人ニ興ル」という文言に注意することは、弁惑物の思想的背景を探る端緒にもなると考えられる。

これまで『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」に注目し、そこに記された『性理字義』、及び、同話を収める『鬼神弁話』上巻の一篇との関連をみてきた。そこで確認されたことは、『金集談』巻四「女幽霊以碁石解其惑事」の原型は近世初期にその姿を確認することができ、儒学、殊に朱子学と密接に関わる話であるということである。したがって、「妖ハ由テ人ニ興ル」という思想的背景を探ろうとする時、近世初頭に目を向けねばならない。

まず、弁惑物を考える際に大きな示唆を与えてくれる仮名草子、中山三柳『飛鳥川』（慶安五年・一六五二）に目を向けてみたい。近世初頭において怪異否定を示した『飛鳥川』は弁惑物を考察する際には看過できない、重要な位置を占めるものと考える。堤氏は、『飛鳥川』の一節に加え、新井白石『鬼神論』（寛政元年・一七八九）、中江藤樹『為人鈔』（寛文二年・一六六二）をあげ、さらに、村上俊清『三才因縁弁義』（享保十一・一七二六）をひき「十八世紀初めの通俗教訓の到達点」をみるが[27]、それらと文芸作品が直接的に結びつくものとも思えない。そういった思想が底流していたことは事実であろうが、それらとの間にはやはり距離があり、その受容の経過にはいくつかの階梯があったであろう。やはり、作品毎にそれらの思想がどのように文芸作品に影を落としていったのかを追求していかなければならない。

三浦邦夫氏が説くように、『性理字義』は『飛鳥川』に影響を与えた書物の一つであり、「下巻の怪変について記した2段から8段までのうちの3段・4段・5段・7段」は「『性理字義』

に全面的に依拠して配した」というところは注意したい。[28]『飛鳥川』下巻五段を次に記す。[29]

又、左伝に、妖由レ人興といふ時ハ。其中に於ても。愚心のまどひより。出事おほかり。たとひ。妖怪の事ありとも。妖ハかれが妖にして。我にあづかる事なければ。心にかくるにたらず。

と、『左伝』「荘公十四年」をひいて「妖由レ人興」ということを説明する。近世期初頭の仮名草子に『性理字義』は影響を与え、こういった弁惑の思想の原型がすでに形成されていたことが確認されよう。これは前にみた怪異小説に散見される弁惑物の断片と無関係ではないであろう。つまり、近世初頭に形成された弁惑物へ通ずる思想潮流がずっと流れ続け、それらが明確に意識されるか否かは別の問題としても、少なくともそういった潮流は文芸作品に影響を与え続けたと考えられる。

『飛鳥川』と『金集談』とは刊行年代に隔たりもあり、これらを単純に同一の俎上に載せることには無理があろう。両書の直接の影響関係を今は指摘し得ない。しかし、ここで両書の間に『性理字義』、あるいはそれに類する書を置いてみたとき、にわかに別の視界が開けてくる。近世初期と中期、その間およそ百年の隔たりがある上でなお、『性理字義』の説く「妖ハ由テ人ニ興ル」という思想がその根幹にあり、両者を結んでいるのである。

『性理字義』は近世期に刊行された朱子学の入門書の一つに過ぎない。しかし、あえて大言すれば、近世期において怪異を論じる場合、『性理字義』の説く、「妖ハ由テ人ニ興ル」という朱子学の思想は基本的な意識の一つだったのではなかろうか。そして、初学者にも手に取りやすい『性理字義』や『諺解』などの朱子学の入門書、あるいは『鬼神弁話』などの書物がこういった思想を伝播させたことも充分に推察し得る。

近世怪異小説を読もうとするとき、こういった性格の儒学書にもっと注意を払って然るべきであろう。近藤瑞木氏によれば、「一般に儒学は合理的な学問であると言われることが多いが、近世の儒家思想は必ずしも怪異を非合理的なものとして否定していたわけではない。むしろ、その存在を合理化することで、その神秘性、超越性を否定しようとしたと見るべきだろう」という。[30] 傾聴すべきであろう。近世期において、儒学からの文芸作品への影響はいうまでもないことである。しかし、怪異小説に与えた影響の実態は未だ藪の中といわざるを得ない。右のような思想的な影響の実態を探るためにも、今後は『飛鳥川』などの文芸作品に止まらず、それらに影響を与えた『性理字義』のような、より直接的な儒学書を更に追求する必要があろう。それらと文芸作品との影響関係、その距離を個別に検討していくことで弁惑物、ひいては近世怪異小説の基調の一つがあきらかになるのではないだろうか。殊に、『性理字義』に限っていえば、前にひいた林羅山『諺解』の他、松永尺五『彝倫抄』（寛永十七年・一六四〇）、浅見絅斎『性理字義講義』（享和元年・一八〇一）、山崎闇斎の発言など、その親近性、理解の仕方などに大きな違いがあるものの、近世思想界にある程度の位置を

占めていた、とみるべきであろう。[31] また、怪異小説との関連でいえば、林羅山『怪談全書』（元禄十一年・一六九八）巻之四「頼省幹」に「性理字義ニ此理ヲ云リ」とその書名を記す。[32] 怪異小説との関連を考える上でもさらなる問題を提起しているのである。

また、浅井了意『狗張子』（元禄五年・一六九二）巻六「杉田彦左衛門、天狗に殺さる」にみられる「和尚」の次のような文言も注意される。[33]

妖は、妖よりおこる、と、いへり、邪気勝ときハ、正気うバふとかや。我が心、すなハち、邪気のもとゝなる故に、やがて、正気をうバゝれて、妖怪にあふなり。

「和尚」の発言において、妖怪にあう理由を自らの心に求めていることが確認される。これまでみてきた「妖ハ由テ人ニ興ル」と表現上は異なっていても、その意味するところはかなり近似したものが仏教の立場から発言されるのである。二章でも触れたが、こういった妖の原因を人の心に求める、といった思想が儒教のみならず、仏教からも発せられているのである。しかし、今はこれ以上この問題に立ち入ることができない。ここでは、こういった思想が儒教のみならず、仏教からも発せられていることを確認しておくに止める。

「妖ハ由テ人ニ興ル」という文言を中心に、弁惑物へと通ずる一つの思想の拡がりを粗々とみてきた。儒学との関連を中心にみてきたが、注意しておきたいのは、仏教との関連もみられることである。かなり似通った思想と考えられるが、こういった思想がどのように弁惑物、ひいては近世怪異小説の基底となり得たか、宗教、思想の文芸作品への影響を考える上からも注意される問題であろう。宗教、思想と文芸との距離、温度差をみていく必要があるが、これらの問題は今後の課題としたい。

六　おわりに

弁惑物の要素は近世怪異小説の中にその芽を宿していた。それは近世怪異小説の一要素といってもよい。その一要素を集成し、拡大したものの一つが弁惑物、『金集談』の一篇であったといえる。そして、本文中に記された朱子学の注釈書である『性理字義』との比較を通して、弁惑物の特徴の一つを示した。また、同型の話が『鬼神弁話』、さらに遡って『中庸或問』に記されていることを確認し、そこから弁惑の方法、素材の具体をあきらかにしてきた。弁惑物に注目することで、儒学、殊に朱子学と近世怪異小説との直接的な関連が看取され、その思想、方法の結びつきが強固であることが確認された。さらにはその拡がりが思いの外に大きなものであり、怪異を否定する、というおよそ怪異譚と対極にあるような思想と近世怪異小説が隣りあわせに同居している様相がみられるのである。というよりも、朱子学にみられるような合理的な思考法が通底する中に、近世怪異小説がある、といった方がよいのかもしれない。そういった全体の構図は未だ明瞭に描くことができないが、近世怪異小説を繙く際、弁惑物、あるいは弁惑の要素をもつ怪異譚により注

意を向けねばならないことは既にいうまでもないであろう。本論では検討することができなかったが、既に示したように、弁惑の要素には儒教のみならず、仏教の影響も確認される。こういった仏教思想からの影響、さらには儒教思想と近似している点も、今後さらに突きつめていく必要がある。

本論で検証した怪異に対する合理的な解釈といった点に注目した時、近世怪異小説の当時における意味、読まれ方も再考されねばならない。即ち、少なくとも近世期においての怪異小説は単純に恐怖、不可思議な話を記したものではなく、そこには理性的な眼差があり、そのうえで怪異小説をたのしんでいた、という可能性があるからである。そこに近世怪異小説の可能性の一つをみることも可能であろう。そのように考えてみると、江戸の怪異小説を今一度、読みなおしてみる必要がありそうである。

注

(1)「弁惑物読本の登場―人が人を化かす話」(『江戸の怪異譚』(二〇〇四年、堤邦彦、ぺりかん社)所収。第三部・第三章・Ⅲ)、及び、「弁惑物怪談の視覚」(佐藤太二、『伝承文学 研究の方法』(二〇〇五年、野村純一、岩田書院)所収)

(2) 注1堤氏、佐藤氏、前掲論文。及び、「仮名草子の百物語・二『百物語評判』」(『近世怪異小説研究』(一九七九年、太刀川清、笠間書院)所収。第二章)、「怪談の弁惑物―亡者片袖説話の場合―」(二〇〇〇年、太刀川清、「学海」十六)、及び、『選択古書解題』(一九三七年、水谷不倒、奥川書房・釣之研究社)

(3) 注1堤氏、佐藤氏、前掲論文。

(4)『近世民間異聞怪談集成』(二〇〇三年、堤邦彦・杉本好伸、国書刊行会)「解題」(堤邦彦)及び、注2太刀川氏前掲書所収の論文。但し、太刀川氏は「仮名草子のこの時代にあっては、世間の風説にそれほどまでに弁惑の必要性もなかったようである」といい、積極的に弁惑物の先便としての位置付けを行うわけではない。

(5)「怪異との共棲―『宿直草』に萌(きざ)すもの」(注1堤氏前掲書所収。第三部・第三章・Ⅰ)

(6) 注5堤氏論文に同じ。

(7) 百物語系の怪異小説については、注2太刀川氏前掲書、及び、『百物語怪談集成』(一九八七年、太刀川清、国書刊行会)、『続百物語怪談集成』(一九九三年、太刀川清、国書刊行会)の解説に詳しい。

(8) 注7の『百物語怪談集成』、『続百物語怪談集成』によった。ただし、『百物語怪談集成』、『続百物語怪談集成』所収作品のうち、『百物語評判』はそもそも弁惑物の先鞭に位置づけることができるものであり(注4に同じ)、また、『教訓百物語』は「諷戒教訓の通俗書」(太刀川清氏による解説)である。その意味は別に問いたいが、本論で扱う怪異小説集とは根本的な性格が異なるため、検討の外とした。
また、題名、本文を引用する際は振仮名は省いた。

(9) 注5堤氏論文に同じ。

(10) 富山大学付属図書館蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム)。

原本を翻刻する際の方針は次の通り。以下、特にことわらない限り、翻刻方針は同じ。

一．振仮名、送字、返点は底本に従った。

二．略字、旧漢字は現在通用の字体に改めた。

三．「と」は「こと」、「コ」は「コト」、「ノ」は「シテ」とした。

四．改行は／で示した。

五．「　」をもって文中に引用する場合は煩を厭い、振仮名は省いた。

六．文中に引いた棒線、波線、記号は引用者による。

(11)「翻刻『太平弁惑　金集談』」（二〇〇〇年、伊藤龍平、「国学院大学近世文学会会報」）解説による。

(12)「徳川期の職分論の特質」（佐久間正、『国家と宗教　日本思想史論集』（一九九二年、源了圓・玉懸博之、思文閣出版）所収）及び、「『家業道徳論』の世界―近世思想史における〈普遍と特殊〉」（佐久間正、『日本思想史　その普遍と特殊』（一九九七年、玉懸博之、ぺりかん社）所収）

(13)『家業道徳論』、『三世道しるへ』との関係については、説話・伝承文学会ホームページ（http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsft2/2003mayresume.html）によれば、「説話・伝承文学会二〇〇三年度大会」において伊藤龍平氏に御発表がある由であるが、残念ながら拝聴の機会に恵まれなかった。本論では伊藤氏の御発表の「研究発表要旨」に記されるような問題意識とは異なる視点から論じると考えられるため、諒とされたい。

(14) 注11伊藤氏「解説」に同じ。

(15)「林羅山の『性理字義諺解』―その述作の方法と姿勢」（二〇〇二年、大島晃、「漢文学解釈与研究」五）

(16)『太平弁惑金集談』…宝暦九年、須原屋茂兵衛、大野木市兵衛刊。国立国会図書館蔵本。

(17)「『北溪字義』版本考」（一九九〇年、井上進、「東方学」八十号）

(18) 注17井上氏論文に同じ。

(19)『北溪先生性理字義』…寛永九年、中野宗左衛門刊。神戸大学附属図書館蔵本。

『北溪先生性理字義』…寛文十年、中野小左衛門刊。名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫蔵本（国文学研究資料館マイクロフィルム）。

『北溪先生字義詳講』…同志社大学総合情報センター蔵本の刊記は「寛文八［戊／申］歳／三月吉辰／平安書林［京極通五條橋詰西側／天王寺屋市郎兵衛］」とあるものの、裏見返には「須原屋茂兵衛」ら七書肆の名が記される。そこに「天王寺屋」の名はみえず、何らかの事情があったものと考えられるが、本論と直接には関わらないため、ここではおく。また、『近世漢籍叢刊：和刻影印』思想初編11（一九八五年、岡田武彦、荒木見悟主、中文出版社）所収本は刊記を「寛文八［戊／申］歳／三月吉辰／銅駝坊書肆村上平楽寺重版」とする。

(20) 注17井上氏論文に同じ。

(21)『聴雨紀談』…元禄二年、志水長兵衛、久保田長兵衛刊。『和刻本漢籍随筆集』第八集（一九七三年、長澤規矩也、汲古書院）によった。

(22)『性理字義諺解』…万治二年、山口市郎兵衛刊。京都大学附属図書館蔵本。

(23) 注15大島氏論文に同じ。圏点原文。

(24)『鬼神弁話』…延宝四年、深江屋太郎兵衛刊。西尾市立図書館岩瀬文庫蔵本。ただし、神谷氏によると、版元部分は入れ木といい、「延宝四年にどこかしらの版元から初版が刊行され、その後深江屋版にな」ったという（「井原西鶴出典小考」（一九九四年、神谷勝広、「近世文芸」五十九号））。

(25) 注24神谷氏論文に同じ。

(26)『中庸或問』…『近世漢籍叢刊・和刻影印』思想3編5（一九七七年、岡田武彦、荒木見悟主、中文出版社）によった。ただし、引用の際、文字の右に付された記号は省いた。

(27) 注5堤氏論文に同じ。

(28)「仮名草子『飛鳥川』の性格」（一九九四年、三浦邦夫、「近世初期文芸」十一号）

(29)『仮名草子集成』第一巻（一九八〇年、朝倉治彦、東京堂出版）によった。

(30)「儒者の妖怪退治―近世怪異譚と儒家思想」（二〇〇六年、近藤瑞木、「日本文学」五十号）

(31)「浅見絅斎―人倫日用の思想―」（石黒衛、『近世思想史研究の現在』（一九九五年、衣笠安喜、思文閣出版）所収）、『日本朱子学と朝鮮』（一九六五年、阿部吉雄、東京大学出版会）、『近世初期実学思想の研究』（一九八〇年、源了円、創文社）、「松永尺五の思想と小瀬甫庵の思想」（玉懸博之、『藤原惺窩・林羅山』（「日本思想大系28」、一九七五年、岩波書店）所収）など。

(32)『仮名草子集成』第十二巻（一九九一年、朝倉治彦、深沢秋男、東京堂出版）によった。

(33)『仮名草子集成』第四巻（一九八三年、朝倉治彦、東京堂出版）によった。

〔付記〕

貴重な資料の閲覧、引用を許可していただいた関係諸機関の方々に厚く御礼申上げます。

（かどわきだい／本学大学院文学研究科院生）